



## 特別寄稿

第三世代のジェネリック医薬品と  
医療・介護の現場横浜市総合保健医療センター  
有山 良一

平成29年9月25日に健康保険組合連合会が「医療と医療保険制度に関する国民意識調査」の結果について報告した。増加する医療費の伸びを抑制する方法として「後発医薬品の普及」46.6%、「残薬の解消」34.5%、「病気の予防」29.1%の順で多い回答が得られた。

後発医薬品の認知状況については93.6%が知っていると回答した。このうち後発医薬品の服用経験がある人の割合は79.5%と答えた。平成19年の調査では17.6%、23年では47.4%に対して32.1ポイント増加し、後発医薬品が急速に定着していることが明らかになった。

この30年間に薬剤師を取り巻く環境には様々な変化があった。平成元年は医薬分業元年と言われ、保険薬局数は約3万6千、分業率は11%であった。平成29年には5万8千に近く、分業率は70%に増加してきたと同時に、薬局業務内容も増大し、国民の医薬品・薬剤師への意識も大きく変化してきた。

東大鉄門記念講堂で2004年に開催された第3回ジェネリック医薬品研究会(現:日本ジェネリック医薬品・バイオシミラー学会)で、私が発表した時の参加者数は259であった。当時、勤務した市立病院や大学病院の医師を始めとする医療従事者の中には、ジェネリック医薬品を採用せず、また、ジェネリック製薬企業に対する偏見を持った意見が少なくなかった。しかし、普及のキーパーソンである薬剤師のジェネリック医薬品に対する知識は、ここ10年間で飛躍的に高まり、安価で優れた医薬品を選択し、患者や医療従事者に提供することが、国民から負託を受けた薬剤師の役割と認識されるようになった。隔世の感と思う。

同時に我が国のジェネリック医薬品製剤は、安全・安心を求める時代の要請と各社が切磋琢磨して技術開発を進めてきたため、飛躍的な進歩を遂げた。

例えば、服用性や視認性の高い錠剤本体、PTP包装の鮮明で識別性が高く個別性の良い表示、分かり易く使い易い個装箱、注射剤・点眼剤・液剤等の誤認を防ぐ使い易い容器と表示などが進化した。総合的に医薬品としての安全性が高く有用性に優れたため、安価であると同時に医療従事者や国民に広く支持され、貢献することになった。

日本の高齢化率は2030年には31.6%と推計されている。高齢患者の医療・介護の現状は多様であり、今後とも医療・介護の現場は、AIと技術が進歩して広く導入されても、施設の規模の大小にかかわらず益々多忙になり多くの労働力が求められる。薬局の業務は医薬品管理、調剤と投薬、情報収集・提供を核に、地域社会の医療従事者と介護職員、多職種との細かな連携が強く求められる。従って、高齢者を多く受け入れる施設の薬剤業務の特徴は次のようになる。

①多剤併用の調剤 ②投与量の頻繁な変更 ③一包化調剤とその変更 ④口腔内崩壊錠の使用 ⑤少量規格含有製剤の使用 ⑥割線入り錠剤の分割 ⑦他施設からの薬剤鑑別 ⑧小包装の使用 等である。

従って優先的に採用されるのは、口腔内崩壊錠、印刷錠、その少量規格含量製剤である。口腔内崩壊錠は様々な年齢層にとっても服用し易く、崩壊性が早く嚥下機能の低下がある場合にも適している。印刷錠は刻印錠より識別性が格段に優れているので、鮮明な両面印刷錠は安全性が高く医療過誤防止に役立つ。殊に毒劇薬や抗がん剤の過誤防止対策に極めて有用である。更に今後続々と発売されるジェネリック医薬品の合剤は、統一ブランド名称が短く明瞭で分かり易いので、印刷錠には最適である。

迎える超高齢化社会の現実、我が国の試練ともいえるが、医薬品の開発は我が国の医薬品産業の進歩にも繋がる。優れたジェネリック医薬品製剤の更なる開拓は、我が国のみならず海外での飛躍を待望されている。